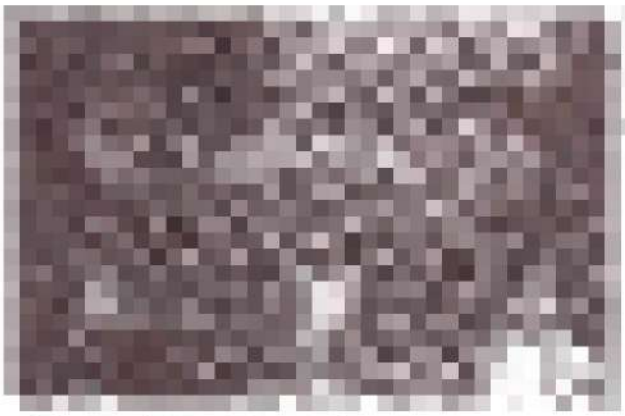
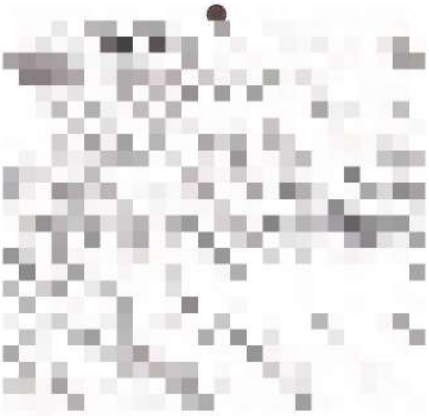
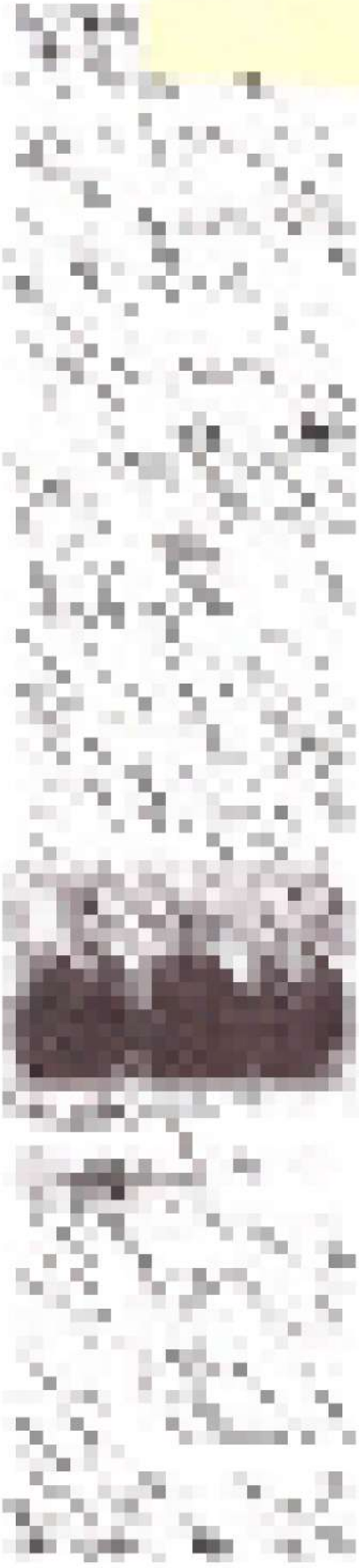


他には、殺されてしまうのが惜しいバンクォーのイルデブランド・ダルカンジェロ、彼なりのベストを尽くした題名役のフランコ・ヴァッサッロ、怪我で杖をついての登場であったが、「妻の七光り」という偏見を払拭するには合格点の素質を見せた、ネトレプコの夫君のユシフ・エイヴァゾフのマクドゥフ、皆が好演していた。

しかし、今宵の陰の功労者はパオロ・カリニャーニだろう。プリマドンナたちが方々に突っ走るのを、冷静で親切な棒さばきでまとめ続け、同郷人の音楽スタイルを守り、裏口からひっそり劇場を後にした。対して黄色い服で楽屋口から出て来たネトレプコは、サインを求める群衆に囲まれ、「メリークリスマス」とご機嫌に繰り返しながら、夫君を残し、リムジンで走り去った。　（中 東生）

ネトレプコほかが好演。バイエルン州立歌劇場《マクベス》
©W.Hoesl





CONCERT 12月〜2月

コンサート、イヴェントから

EVENT

Opera ネトレプコが熱演、バイエルン州立歌劇場《マクベス》

所見した12月21日の2日前、ベルリンのクリスマス市でテロが起きた。アンナ・ネトレプコはそれを受け、20日にメディアを集めて大々的に計画されていた、ミュンヘンの老舗百貨店Beckでのサイン会をキャンセル、この公演も危ぶまれていた。しかし無事幕が上がった舞台上では、パワー全開でこの殺人劇を繰り広げた。

2008年、ニコラウス・バッハラー総裁就任後初の新制作だったこの《マクベス》は当時冷遇されたが、ネトレプコを得て大成功を収めた。全身から発散する演者としてのパワーと、胸声を中音域ギリギリまで保って、上手に頭声にチェンジする彼女の歌唱は始終エキサイティングだったが、最後のアリアでは、客席から響いた携帯電話の着信音が集中力を遮ったからか、高音で声が割れるアクシデントもあった。